

## 福祉村（一九八〇年～）

特養のさわらび荘へ入られた時には、みなさん寝たきりなのですが、毎日リハビリを受けて、日常生活の自立能力が高まってきますと、中には、すべての日常生活が自立可能となった人も出て来まして、「私は百姓をしたいから、近くの農地を借りておくれん。」と言い出されました。

自立できた人は、本来なら、特養を出るべきなのですが、前述のHさんと同様で、この方もご家族のいらっしゃる人でしたので、退院の悲劇ともなりかねませんので、農地を借りてさしあげました。

年をとればとるほど環境の変化に適応する能力は低下してきますので、病状や日常生活能力の変化とともに、施設を転々と変えられるのはよくないことですから、できれば所謂、老人天国のように、すべての高齢者の施設が同じ敷地の中にあるのが理想的なのです。

また、施設を利用されてる人々にとって、すべての面で職員の世話を受けて生かされ続けるのも決して幸せではありません。高齢者でも、障害者でも、今、自分のできることで、まわりの人々の役に立つ働きができないと、幸せにはなれません。

そこで、自立を促進するリハビリ病院、授産施設と福祉工場などを中心に、更に、今自分のできることで、まわりの人の役に立つ働きを見つけやすくするために、世代も違えば、障害の質も異なる人々が利用するすべての福祉施設をまわりに配置する場を作らなければならぬと考え、そのために必要な約五万坪ばかりの土地を探して、東は浜名湖周辺から、西は伊良湖まで、くまなく走り回りました。

その頃、たまたま豊橋に技科大ができることが決まりましたが、その西隣りの野依の荒れ十万㎡が売りに出されていることを知りましたので、早速、野依の人々と話し合いを持ちました。

当時、知的障害者の施設ができると、その付近の土地の値段が下がるから大反対と、まわりの地主達が騒いでいる記事が、新聞紙上にデカデカと載っていた時でしたから、その土地を福祉村建設のために購入することに反対されるのではないかと、大変心配しましたが、野依の皆さんは、福祉に大変ご理解があり、話はトントン拍子に進んで行きました。

そればかりか、福祉村の建設中も、その後の運営にも、野依の皆さんは非常に協力的でして、私達は野依の方へ足を向けては寝られないと言って、いつも感謝しております。

問題は、十万㎡という広大な土地の購入費でした。

特養さわらび荘を建てるのに、それまでにためた貯金のすべてを使い果していましたので、購入費のすべてを借金しなくてはなりませんでした。

そんな莫大な借金をすれば、山本病院は倒産してしまうから、絶対反対という職員が多かったけれども、みんなの幸せと健康を守るためには、どうしても必要だと考えて、その

反対を押しきって、全額借金で土地を購入しました。

更に、病院や福祉施設だけのある場所では、そこで毎日暮らされる人々が、違和感を持たれるかも知れないと考え、なるべく普通の町のようにするために、喫茶やレストラン、日用品の売店、郵便局、お寺と公園なども作り、名前も福祉村と名づけました。

更に、この福祉村を緑豊かな、そして、四季いつでも美しい花の見られる町にするために、日々環境の整備を心がけてきました。

こうして出来上がった福祉村は、高齢者や障害者のための専門の病院と福祉施設のすべてがそろっていますから、日頃ご利用いただく皆様だけでなく、地域のみなさんの健康と幸せを守る総合安全保障基地としての役割も果せますから、いつもすべてを開放し、地域の皆様に必要な医療と福祉のサービスを提供してゆきたいと考えて居ります

ご自宅にいらっしゃる高齢者や障害者の人々が、緊急に必要となられたサービスを、いつでも、どなたでも、お気軽にご利用いただくための「福祉コンビニ」を、現在までに二カ所（東雲町69—5666、弥生町38—9090）設置しましたが、今後も、これをもっともっと増やして、いつでも皆様のご要望に応えられる体制をとってゆきたいと考えております。

また、阪神淡路大震災や中越地震などにボランティアした経験から、認知症や障害者の皆さんが、町の公民館や学校の体育館で、一般市民の人々と一緒に避難生活をされるのは、お互いに非常に辛いことがわかりましたので、近く発生が予測される東海地震の際には、認知症でも、障害者でも、安全に利用できる構造を持った建物があり、その上に、それぞれの専門家である職員がいる福祉村へ避難をしていただこうと考えて、現在、着々と準備をしております。

ベット、マット、毛布、衣料、オムツ、食料品などを購入して備蓄していますし、避難を希望される人々の移送の必要性も調査しております。

更に、福祉村の職員も被災して出勤不能となる者が出ることも想定し、全国各地からいらっしゃるボランティアを適切に配分するセンターも作りました。